

【ポスターセッション】

障害者を表す語のイメージに関する基礎研究3

○ 北星学園大学 豊村 和真 (000049)

キーワード：障害者、イメージ、大学生

1. 研究目的

近年において「障害」の表記を改める取り組みが見られるが、その変更には様々な理由があるとされる。例えば「害」の文字そのものからくるイメージの悪さを解消するためである。具体的には「害」から連想されるイメージが悪いことや、不快を感じる人への配慮という理由が挙げられている。次に、代替する用語がないためひらがなで表記するという理由が挙げられている。さらには、変更により市民の意識向上や「障害」への理解の促進が期待されることや、「害」のイメージが偏見や差別を助長する可能性があるという指摘がなされている(平川 2010)。「害」の文字をひらがなで表記する「障がい」の他に、「障碍(または障礙)」とするべきであるという意見や、「チャレンジド」などのように、英語をカタカナで表記したものなどがある。これらの語が実際にはどのようなイメージを持たれているのかについて、具体的に示すことが重要である。またそれにより「障害者」表記を変更することが実際に障害者に対するイメージ変容にどのように関係するのかを判断するための基礎的な資料を得ることが目的である。なおイメージを研究する方法はいくつかあり、実際に複数の手法で検討したが、本報告では連想法による「障害者」に関連するイメージの差異を示すことを目的とする。なお大学生を対象とするが、研究分野が障害に深く関連すると思われる学科とそうでない学科の大学生のイメージの違いも検討する。

2. 研究の視点および方法

福祉系理学科、経済学科の大学生計 174 名(男性 63 名、女性 111 名)を研究協力者とした。

「障害者」を表す語として、「障害者」、「障がいのある人」、「障がい者」、「チャレンジド」、それぞれの表記について、イメージを自由記述させた。

各表記の認知度を調査するために、今までに評価対象となる表記を見たことがあるかどうかについて回答を求めた。これらの表記を見たことがない場合でも回答させた。さらに回答の際に、どのような障害者が想起されたかについて表記ごとに回答させた。その障害者の種類は「知的障害者」、「身体障害者」、「精神障害者」、「障害者全般」、「その他」とした。「その他」を選択した場合には、具体的な内容を記述させた。

得られた表記のイメージは一部テキストマイニングにより処理された文章について 3 名の判定者により分類された。

3. 倫理的配慮

被験者には本調査がすべて研究目的であり、それ以外には使用しないことを明示した。またいつでも回答を拒否できる権利があること、データの処理に当たっては個人の匿名性に配慮すること等を伝えた。

4. 研究結果と考察

表1 福祉心理学科カテゴリー別早期障害別回答結果

得られた結果を下位カテゴリーに分類した。福祉心理学科は37個のカテゴリー、経済学部では32個のカテゴリーに分類された。そのカテゴリーをより大きな上位カテゴリーに分類した。例えば具体的には「かわいそう」・「大変」は「同情」、「危険」・「区別」は「拒否・回避」のようにまとめ、表1の上位カテゴリーとした（網掛けは表記ごと上位3位）。経済学部もやや類似した結果となった。

上位カテゴリー	障害者	障がい者	障害がある人	チャレンジド	計
同情	8 (6.3%)	2 (1.6%)	7 (5.5%)	1 (0.9%)	18 (3.7%)
拒否・回避	14 (10.9%)	11 (8.6%)	5 (3.9%)	1 (0.9%)	31 (6.3%)
仲間・同類	6 (4.7%)	9 (7.0%)	13 (10.2%)	3 (2.8%)	31 (6.3%)
障害者	34 (26.6%)	31 (24.2%)	41 (32.0%)	10 (9.4%)	116 (23.7%)
困難・弱者	36 (28.1%)	29 (22.7%)	22 (17.2%)	5 (4.7%)	92 (18.8%)
人格	5 (3.9%)	17 (13.3%)	6 (4.7%)	30 (28.3%)	58 (11.8%)
保護・支援	11 (8.6%)	13 (10.2%)	11 (8.6%)	2 (1.9%)	37 (7.6%)
挑戦・努力	5 (3.9%)	3 (2.3%)	10 (7.8%)	44 (41.5%)	62 (12.7%)
優勢能力	2 (1.6%)	3 (2.3%)	2 (1.6%)	0 (0.0%)	7 (1.4%)
その他	7 (5.5%)	10 (7.8%)	11 (8.6%)	10 (9.4%)	38 (7.8%)
合計	128 (100.0%)	128 (100.0%)	128 (100.0%)	106 (100.0%)	490 (100.0%)

※上段は出現数，下段のカッコ内は出現率

各表記の認知度については、福祉心理学科では「障害者」は100%、「障がい者」は97%、「障害がある人」は98%、「チャレンジド」は18%、経済学部では、「障害者」は100%、「障がい者」は92%、「障害がある人」は98%、「チャレンジド」は11%であった。

想起された障害者の種類については、学科別には有意差は見られなかったが、全ての表記において想起された障害者の種類に違いが見られた。最も多く想起されたのは「障害者全般」であった。それ以外では、「障害者」では「知的障害者」と「身体障害者」がほぼ同数、「障がい者」では「知的障害者」がやや「身体障害」を上回り、「障害がある人」と「チャレンジド」では、「身体障害者」が突出して多かった。

なお、本研究は非会員の樋口花美氏、および西館裕子氏との共同研究の一部をまとめたものである。